

いろいろな人に聞いてみた

なんでその仕事を えらんだの



2

こんな人に
聞きました！

ヨシタケシンスケさん (絵本作家)

渡部陽一さん (戦場カメラマン)

野村萬斎さん (狂言師)

てい先生 (保育士)

吉田沙保里さん (レスリング選手)



ヨシタケシンスケさん



ぼくが子どもだったころ



おまーまー! だからー! かわどびするって 言ってるでしょー!

シンスケ

お兄ちゃん は!?

えっ どうちも 楽しそうだなあ



おこられたり ケンカしたり するのがイヤで まわりに合わせて ばかりだった

平和が一番!

宿題は... 明日の支度は... 片づけは... たまたま... なんだ... おじいちゃん... じゃあ... はーい

オトナから見たら 「協調性」がある いい子に見えた かもしれない

家族や学校に不満なんて なかったけど

片づけは... たまたま... じゃあ... 明日の支度は... 宿題は... なんだ... おじいちゃん... じゃあ... はーい

.....

.....おかしい

反抗期が 来ない!



何も問題がないと ぎゃくに不安になるタイプ

中学生になっても 高校生になっても 反抗期は来ず

このままオトナになって だいじょうぶか? なんて思っていた

あれこれ想像して 不安になる 性格だったんだ

ヨシタケ 将来何したいの?



ぼくの「協調性」は ウラを返せば 「自主性」がないと いうことだった 自分で決めて責任を 取るのもこわかった のかもしれない

夢かあ

だれか決めて くれたらいいのよ



物づくりをする 職人になりたいくて 美術コースのある大学へ



大学では 楽しく物づくり 人を喜ばせる 楽しみを知った

あれって どうやって つくるんだろう?

楽しそう だな...

それから いろいろあって 絵本作家に

想像したことを 形にしていくのって おもしろいよね

夢なんてなくても 自分の居心地のいい場所を 選んだらいいんだよ



ヨシタケ シンスケさん
絵本作家

1973年、神奈川県生まれ。『りんごかもしれない』（ブロンズ新社）で絵本作家デビュー。『もうぬげない』（ブロンズ新社）、『リゆうがあります』（PHP研究所）ほか著書多数。国内外で人気を集め、受賞も多数。

ポイント

1 子どものころは いろいろ想像して不安でいっぱい

ネガティブで、大胆なことはせず、平凡に生きていた。夢なんて、とくになかったよ。

2 仕事をはじめたら ストレスでつらくなっちゃった

自分に合わない仕事をえらんだことで、つらくなった時期がある。好きなこと、やりたいことに仕事を変えたら、居心地がよくなった。

3 自分の居心地のいい場所を 仕事にしたっていいんだ

夢ややりたいことが、なくてもいい。居心地のいいほうに進んでいけばいいんだ。

自分の居心地のいいほうへ進めば、自分に合った仕事に出合えるよ

1 子どものころは いろいろ想像して 不安でいっぱい

子どものころのぼくは、あまえんぼうでわがりで、いろいろなことが心配で、いつもなんとなく不安をかかえていました。といっても、子どものころ、こわい思いをしたり、つらい目や痛い目があったことはありません。失敗したからといって、親にしかられた

こともありません。それなのに、何でも不安に思ってしまうのは、何かで失敗したらどうしよう、だれかにしたらどうしよう、思いもよらないことが起きたらどうしようと、ぼくが勝手に、先のことを悪いほうに想像してばかりいたからです。

そんなわけで子どものぼくは、人からしかられないように、責められないように、なるべく大胆なことにはせずに生きていたんだと思います。

家には絵本や本がたくさんあったの



で、よく読んでいました。でも、作家になりたいと思ったことなんて、一度もありません。作家とかミュージシャンとか、何かを創作したり表現したりするのは、「おれには伝えたいことがある」「おれを見てくれ」「おれの話聞いてくれ」という人がなる職業だと思ってたし、ぼくにはまったく、そんな気持ちはなかったからです。いつも何かしら不安だけど、すぐくつらいことも起こらず、その代わり特別うれしいこともない。高校生まではそんなふうに、平凡に平凡に過ごしていました。でも、「生きるってこんなものだろう」と思っていたので、これから先もこんな感じなんだろうな、と思っていました。

しかし大学に入って、ぼくは目覚めます。映画の小道具をつくる職人にほんやりあこがれていたぼくは、美術コースのある大学に進み、物づくりの技術を身につけようと思っていました。しかし、大学の授業では技術を教えてくれるわけではなく、その代わり

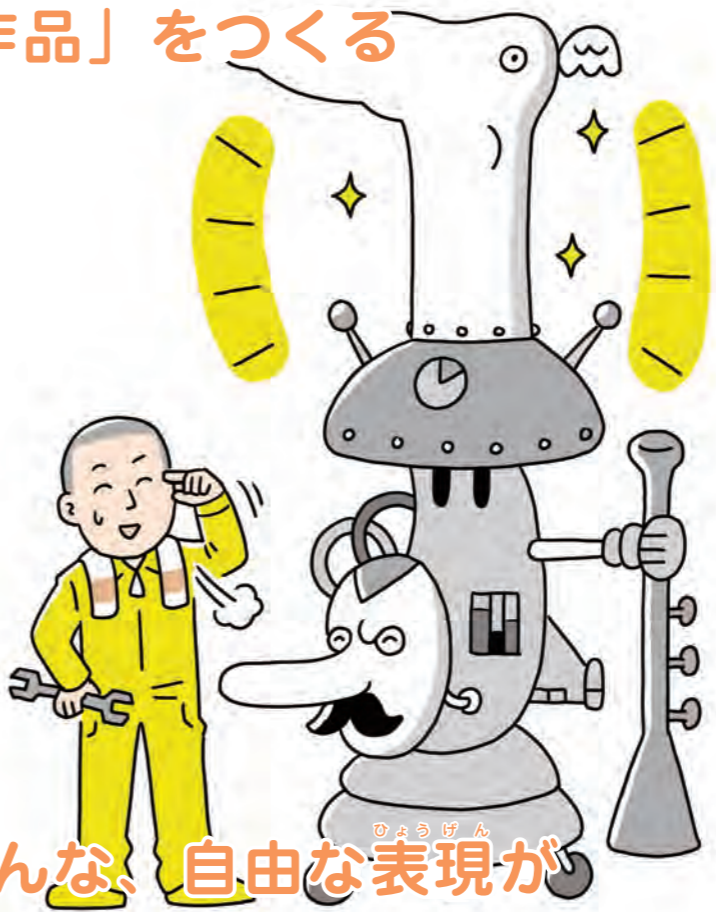
何をどうつくってもOKという自由なところでした。

いろいろな人に聞いたり調べたりして技術を身につけながら、ぼくははじめに課題をこなして物づくりにはげめました。すると、それを見た友だちが「いいねー」とぼくのつくったものをすぐおもしろがってくれたのです。

ぼくはどてもうれしかったし、同時に目からウロコが落ちました。

それまでぼくは、「作品」というものは、何か伝えたいことや、強いメッセージがなくてはいけないんじゃないかと思いこんでいましたが、自分がつくりたいようにつくった「作品」を発表してもいいんだと、はじめて知った

つくりたいように「作品」をつくる



そんな、自由な表現があってもいいんだ！

からです。

自分のつくったものを人に見せる、見た人がそれを楽しんでくれる。そんなコミュニケーションを今までしたことがなかったので、「こんな楽しいことがあったなんて！」と、そこからぼくは、毎日とても楽しく物づくりに打ちこむようになりました。

2 仕事をはじめたら

ストレスで つらくなっちゃった

楽しい大学生活にも終わりが近づき、ぼくは仕事を探しはじめたのですが、映画の小道具をつくる会社は、経験のない新人を募集してはいませんでした。どうすればいいか、とほうに暮れていたとき、同級生のひとりがゲーム会社に就職を決めたことを知りました。ぼくは、何だかすこくかっこいい気がして、「そつだ、ぼくもゲーム会

社の社員になろう！」と、急にその気になって、就職試験を受けることになったのです。ぼくはゲームをしないし、ゲームセンターにも行ったことすらないのに、本当に勢いで決めてしまった感じでした。でも、「ゲームをよく知らないからこそ、何か新しいものをつくりだせるかも？」と、そのときは妙にポジティブでした。

運よく就職試験に合格して、ゲーム会社で働くことになったぼくですが、会社に入ってから出した企画は、出すものすべて、「使えない」とボツになってしまふのです。

ぼくは大学時代の経験から、自分のアイデアで人をおもしろがらせたり、喜んでもらったりするのが好きでしたが、ぼくのつくるものは、見た人がニヤッとしたり、じわじわとおもしろがってくれるようなもの。ところが、ゲーム会社が求めるのは、人を興奮させるおもしろさ、楽しさです。だから、ぼくの企画は、まったく通用しなかったのです。

手応えのない日々、しだいに会社へ行くのがつらくなり、ぼくはストレスでいっぱいになっていました。そのうち通勤電車の中では、手のひらに想像で小人をつくりだそうと、じっと手を見つめ続けるようになっていました。ここに想像の世界の友だちをつくらることができたら、会社に行くというつらい現実を何とか乗りこえられるんじゃないかと、本気で考えていました。ぼくは、かなり追いつめられていました。

でも小人は現れず、会社にいる間



は、企画を考えるふりをして、ずっとノートに落書きをしていました。後ろを人が通ったらパツと手でかくせるような、とても小さい絵です。ぼくがいまだに大きな絵をかけないのは、ぼくの絵本は小さな絵を拡大して印刷してもらっています。このつらい日々、たくさん小さな落書きをかいていたからなのです。

そんな毎日を過ごしているうちに、大学時代の同級生が「いっしょに仕事をしてみない？」と声をかけてくれました。同級生は、広告に使う小道具などをつくる仕事をしていて、それを手伝ってほしいということでした。そしてこれこそ、ぼくがやってみたかった仕事です。新しい仕事は、物づくりを人に喜んでもらうことができる、とてもやりがいのある仕事でした。

つらい会社員時代にたくさんたまった落書きは、せっかくなので冊子にして、ときどき開く個展やグループ展で配りました。これが意外と評判がよくて、出版社の人から、「このイラスト

【シリーズのご案内】 シリーズ NDC370 / A4 変型判 / 64 ページ / 図書館用堅牢製本

いろいろな人に聞いてみた

なんでその仕事をえらんだの？ 1

桜井 政博さん（ゲームクリエイター） / 菊間 千乃さん（弁護士）

鎧塚 俊彦さん（パティシエ） / 金田 朋子さん（声優）

皆川 明さん（デザイナー）

【コラム】 José. 川島 良彰さん（コーヒー栽培技師）

いろいろな人に聞いてみた

なんでその仕事をえらんだの？ 2

ヨシタケ シンスケさん（絵本作家） / 渡部 陽一さん（戦場カメラマン）

野村 萬斎さん（狂言師） / てい先生（保育士）

吉田 沙保里さん（レスリング選手）

【コラム】 澤 円さん（大学教員 / 企業コンサルタント）

